

平成二八年作句

ちゃんちゃんこして鉢巻の孫の手や

紅いベベ思わず微笑む七五三

ハンドマイク私語の男女に振り向ける

夏草や先祖が墓みな屋敷向く

地車を引く手たくまし秋河内

安芸離れ京河内集いて今摂津

永観堂紅葉に微笑む妻の顔

秋天神幼き頃の少年誌

忍び泣く祖母の思い出秋遠し

枯葉浮く蹲の水に薄氷

落ちぶれし旧家の軒の氷柱かな

紅き寺廓の子女の春何処

私語もやむ幕末花街の大蠟燭

妻の焼く秋刀魚の香り秋進む

老いに入りむなしさ半ばで大片づ

安芸門徒備前法華も似た雑煮

友弔う備後の冬山道険し

大酒も小事も飲みこみ年の暮れ

伯母の味けんちん汁を一人啜る

京土産持ちて家路の退職日

川柳と俳句が同居の雑記帳

冬日和こちらより高し学生の声

河原町昔日の友見た年の暮れ

寒椿花びら落ちて友訃報

世は変わっても御室の桜やわらかし